
断罪の塔

夢月@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

断罪の塔

【Zコード】

Z3354BA

【作者名】

夢月@

【あらすじ】

断罪の塔には魔の王が棲むという。天より高く永劫の闇が潜む塔での物語。

光が断たれた。もしかしたら目の前にある扉から青空を望むことはできないのかもしない。それにしても、眼前に広がる景色は恐ろしく閉鎖的だ。細い道が真っ直ぐに闇へと続いている。壁の窪みには、誰が灯したのかも分からぬ蠟燭の火が仄かに道を照らしていた。燭台ごとそれを奪うと、彼 ハーシュエルは小さな光を携えて闇へと溶け込んだ。

断罪の塔。いつ頃から呼ばれたのかは定かではない。ただ、最上階には魔の王が棲むという。魔の者が蠢くその塔は、昔から討伐隊が幾度となく送られてきたが帰ってきたものは少なく、生き残りに話を聞いてみても異口同音にして、あの塔は人が踏み入れる場所ではないと唱えるのであった。そのような塔だが、莫大な古代遺産が秘めているのだろうと予想され、しばしば古代学者達の間に話題が上がり好奇心を搔き立てていた。事実、塔には聞いたこともないような機械があつたり、そもそも塔自体に強力な術が施されていた。だから塔の秘密を明かそうと討伐隊も絶えぬことなく組まれているのだ。

しかし、命が惜しいという者も多く討伐隊に名乗りのあげぬ者ばかり。莫大な報酬と名誉を与えようと、王が呼びかけてやつと歴戦の兵が集まつた次第であった。それでも足りずに、密約を交わして牢獄から出すということを条件に討伐隊に加わつた大罪人も少なからずいたのだから、断罪の塔の恐ろしさは伺えるだろう。

さて、ハーシェルは勤勉な若者で剣の腕には目を見張るものがあった。だから、齡二十二という若さで城の精銳部隊に加わったのも頷ける。そんな彼だが、一つの噂が絶えなかつた。

死神と契約していると。一度だけ、戦地に赴いたことがある彼だが、その時の活躍ぶりといつたら正に一騎当千を体現したようだつた。そして彼の背後には夜の闇より深いロープを被り、月光のごとく青白く輝く鎌を握つた死神が見えたといつ。問い合わせてみたものの、ハーシェルは困つたように笑うばかりだつたので、徐々に周囲もあのハーシェルに限つて死神と契約などということはないだろうという結果になつた。

ある日の朝、ハーシェルがいつものように剣の手入れをしていると陛下からの使いがやつてきた。

「ハーシェル様、陛下から直々に書状が届いております」

ハーシェルに差し出されたのは一通の手紙だつた。封を破るとそこには淡々と断罪の塔への誘いが書かれてあつた。強制はされないらしいのだが、ハーシェルはこれにもやはり困つたような笑みを浮かべただけだつた。

「返事はどうしたらいい?」

「お決まりでしたら私が陛下に伝えますが」

そこで初めて使いが憐憫の情をこめて自分を見つめていることに気がついた。

「では、行くと伝えておいてくれればいい」「わかりました」

手紙をつきかえすと使いは顔色を窺うようにハーシェルの顔を見

た。ハーシェルは憮然とした風でもなく、しばらくは使いを見据えていたがやがて剣の手入れの作業に戻った。使いも逃げ出して行くように走り去つて行つた。

そうして一週間もたつと、ハーシェルの家の前には迎えの馬車が来ていた。剣や鞄は兵士に没収され、軽装で馬車に乗り込む。そこには頑丈な鎧を纏う兵士が数人ほどいた。途中で暴れだしたり逃げ出さないための見張りだろう。ハーシェルは道中ただ瞼を閉じるばかりだった。

「ハーシェル殿。最終確認をします」

夕刻になると、一人の兵士が初めて言葉を発した。

「ハーシェル殿の任務は魔の王討伐と塔内部の調査です。断罪の塔への派遣期間は一年です。報酬は魔の者と魔の王討伐で支払われます。塔に入る前に千里眼の術を施しますので不正はできません。塔を出た場合、報酬は破棄したとみなします。食糧は週に一回支給されます。よろしいですね？」

「ええ」

短く答えると、兵士もまた頷いた。沈黙がまた訪れる。ここまできてハーシェルが逃げる気が無いとわかつたのか、兵士たちの間に緊迫した空氣は薄らいでいた。

そして一刻ほどたつと着いたのか馬車が止まつた。一人の兵士に促され、馬車から降りる。

鬱蒼とした木々に囲まれて聳え立つ塔。塔の全貌は霧に隠れて見ることはできなかつた。誰かが息をのむ音がした。一行は塔の入口まで歩く。入口では見張りの兵士数人と神官が立つていた。

「では、健闘を祈ります」

先ほど確認をしてきた兵士が敬礼をすると、他の兵士もそれに倣つた。見張りの兵士の傍に控えていた神官がハーシェルに祈りと術とを施すと、それが合図のように石造りの扉が音をたてて開く。鞄と武具一式を手渡されそれを手早くつけるとハーシェルは一步塔の内部へと踏み出した。外では、扉が閉じるまで兵士たちは敬礼をしていた。

塔の内部はやはり閑散としていた。迷路のように道が何本も枝分かれしていたが今の所は何かがでるというわけでもない。

その時、かすかに人の声がした。人の声がすること自体は別段不思議でもなかつた。討伐隊が一階に留まっているのだろうと。しかし、その時ハーシェルの耳に届いたのが笑い声だつたのだから驚きだ。自然に早足になる。そして細い道を駆けていくと、眼前には円形の空間が広がつた。数十人の人間がそこに居た。ある者は生肉を焼き、ある者は武器の手入れをして。

「お疲れ様。断罪の塔へようこそ」

一人の青年がハーシェルに歩み寄つた。よく目をこらさなければ、彼の服装が元は白い服だとは気付かないだろう。それほどまでに彼の服は黒く汚れていたのだから。彼の顔はまだ少年のような幼さを残しているが、それでもゴバルトブルーの瞳は達観していたように見えた。

「一階は魔の者が出るわけじゃないから安心していいよ。ここつらも僕も討伐隊。よろしく」

青年が皮肉気味に笑つた。やけにその笑い方が様になつていてる。

「新参者に軽く説明するけど、ここを拠点にして皆生活してるので
わけ。だから、ここで寝たり食事したりする。で、ここで協力して
塔の情報を交換して最上階まで田舎していってこと。中には単独
で行動する奴もいるけど、お勧めはしない」
「どの階まで塔の探索が進められている?」

ハーシュルの質問に青年は指を五本立てると溜息をついた。

「それじゃ、お互に頑張ろう」

そういうと、青年は手をひらひらと振つて輪の中へ戻つて行つた。
まるでこれが義務だと言わんばかりにあつさりとした別れだ。
手持ち無沙汰で腰をおろすと疲れが一気に押し寄せた。眠気が襲
つてくることに抗いもせず、そのまま睡魔に身を任せた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3354ba/>

断罪の塔

2012年1月8日18時46分発行